様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　５ 年　７ 月　５ 日現在

機関番号：３２６３０
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2017～2022
課題番号：１７Ｋ０３８５８

研究課題名（和文）17-19世紀におけるヨーロッパ繊維産業の繊維横断的研究

研究課題名（英文）A reinterpretation of the history of European textile industry in the 17th-19th centuries

研究代表者
竹田　泉（Takeda, Izumi）

成城大学・経済学部・教授

研究者番号：２０４４０２１６

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,700,000円

研究成果の概要（和文）：　本研究では、繊維の別ではなく織物の質に着目することによって、産業革命前後のヨーロッパ繊維産業史を再解釈することを試みた。第１に、産業革命前からイギリス・ランカシャーで製造されていた「ファスチアン」の特徴が布表面の起毛にあることに着目し、その製造の起源を中世イタリアに遡ることができることを示した。第２にアメリカ市場においてイギリス・ランカシャーの繊維産業と競合関係にあったアイルランド・リネン業の奴隷の衣服用の布生産の歴史的展開を経済史的側面だけなく、社会的、思想的側面から明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究は、次のような学術的意義を有するものと考える。第１に、繊維横断的考察をすることによって、それまでは別々に語られていた異なる時代や地域の繊維産業の相互関係を明らかにすることができた。この分析枠組みは他の繊維産業史を研究する上でも有効であろう。第２に、織物の性質（色や柄、手触りなどの特徴）への着目は、周辺の学問分野との学際的研究を深化させるものである。

研究成果の概要（英文）：This study discussed how the history of the European textile industry prior to as well as following the Industrial Revolution could be reinterpreted by focusing on the characteristics of textiles. First, the study found that the main feature of a fabric called fustian was its raised or napped surface and showed that the manufacture of fustian in 18th-century Lancashire, England, could be traced back to medieval Italy. Second, the study discussed how the culture of improvement affected the development of the Irish linen industry which provided coarse textiles for slaves' clothing in America and competed there with other European textiles including ones of Lancashire.

研究分野：経済史

キーワード：繊維産業　イギリス産業革命　アイルランド　綿業　リネン　アメリカ　奴隷　織物

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

産業革命を牽引したイギリス綿業は、経済史研究における古典的テーマである。クラフツ＆ハーリー（N. F. R. Crafts & C. K. Harley）の研究が 18 世紀イギリスの漸進的な経済成長を明らかにして以降も、同時期のイギリス・ランカシャー地方における綿業の急激な発展は否定されることはなく、むしろ、その革命性や特異性を新たな射程から再確認する研究が蓄積されてきた。それらは、社会史、文化史、考古学など周辺領域の成果の摂取やグローバル・ヒストリー研究の進展に依るところが大きい（例えば G. Riello, *Cotton*, 2013）。これらは、基本的に「綿」といった一つの繊維の枠組みでなされた研究であるが、同時に他の繊維との関係を視野に入れることを自ずと要請したものでもあるといえよう。すなわち本研究は、繊維産業の歴史的展開は、一つの繊維の枠組みでは議論し尽くせないのではないか、という問題関心から始まっている。

この問いを考える上で手がかりとなるのは、「ファスチアン」である。ファスチアンは産業革命前のイギリスにおいて製造されていた亜麻と綿の混織物であり、その製造業はイギリス綿業の初期形態と一般的には理解されている。しかしながら、これに関しては以下のような疑問をあげることができる。第 1 に、実際は、産業革命前の亜麻と綿の混織物がすべて「ファスチアン」と呼ばれていたわけではないこと、である。この点を指摘した先行研究はあるが（古典的な研究として、Wadsworth & Man, *The cotton trade and industrial Lancashire*, 1931 を挙げておく）、それが、綿と他の繊維との関連を社会経済史的に考察する研究に深く発展することはなかった。第 2 に、イギリス綿業の確立は、「キャラコ」と呼ばれたインド製純綿布の輸入代替化の最終段階でもあったわけだが、そのキャラコの国産化以前、イギリス綿布の前身とされるファスチアンはその性質上キャラコの代替物とはならなかったこと、である。実際に代替したのは、ファスチアンではない亜麻と綿の混織物や純亜麻織物であった（拙著『麻と綿が紡ぐイギリス産業革命』2013 年）。

２．研究の目的

以上のようなイギリス綿業をめぐる従来の研究から導き出される問題から、本研究は、綿以外の繊維との関係のなかにイギリス綿業を位置付けることによって、産業革命前後（17〜19 世紀）のヨーロッパ繊維産業史を再解釈することを目的とした。

本研究では次の分析視角をとった。第 1 に、繊維製品の原料ではなく、製品としての質に着目するというものである。それは、モノの消費／使用は、そのモノの特定の性質を根拠としていること、また、その特定の性質を生み出すのは、生産過程における特定の技術であるいう問題関心によるものである。よって、ここでは、それぞれの技術はその量的な生産力に応じ序列化されるのではなく、製品の特定の性質を生み出すものとして再定置される。第 2 に、異なる繊維産業の盛衰をグローバルな連関のなかで再検討するというものである。これはまず、同時期のグローバルな連関から、ランカシャー綿業が直面する競合や補完の関係が他の繊維産業との間にどのように構築されているかを明らかにするものである。次に、ヨーロッパ諸地域における他の繊維産業の盛衰の歴史のなかに産業革命期ランカシャー綿業をどのように位置付けることができるかという問題である。

３．研究の方法

本研究は、繊維品のモノとしての性質に着目するため現物調査を必要としたが、コロナの感染拡大で予定通り行うことができなかった。そのため、研究内容の調整・変更を余儀なくされた。また、周辺領域の研究調査も必要となるため、その分野の先行研究調査や、専門家・研究者との学術交流を重点的におこなった。

研究活動の概要は以下の通りである。

（１）　先行研究調査について

研究内容を変更したため、その部分の先行研究調査を追加でおこなうこととなった。

（２）　資料調査について

繊維品の現物調査はヨーロッパだけでなく他の地域(特にアメリカ合衆国)でも予定していた。しかし、コロナ感染拡大のため計画通り行うことができなかった。そのため、研究内容を調整・変更する必要が生じた。実施した主な調査先は、2019 年 3 月のイギリス、2023 年 3 月のフランスとベルギーである。

日本では、群馬繊維工業試験場の協力を得て、さまざまな繊維の化学的調査をおこなった。また、京都服飾文化研究財団など国内で当時のヨーロッパ製繊維品を所蔵する機関での調査もおこなった。

文献史料については、コロナ禍においてはオンラインで入手できるものを中心に調査をおこ

なった。

（３） 研究会の開催・参加について
主なものは以下の通りである。
①2017 年 6 月に京都の立命館大学において、ジョン・スタイルズ氏を招きシンポジウム（Popularizing Fabrics and Clothing 17th-19th centuries: Materiality, Value Formation and Technology）を他の研究者と共同で開催した。
②2017 年 6 月の政治経済学・経済史学会春季総合研究会（「グローバル経済史にジェンダー視点を接続する」）において個別報告をした。
③2019 年 3 月にイギリスのウォーリック大学の協力を得て開催されたヴェネツィアでのシンポジウム（Mixing Fibres between East and West: Textiles and Materiality,16th-20th centuries）で個別報告をした。
その他、小規模の研究会を主催した。それらはコロナ禍ではオンラインで開催した。また、後述するように、本研究との関連で、南ウェールズ大学のクリス・エヴァンス氏などとの奴隷用衣服に関する共同研究を開始した。

（４） 成果発表・総括について
発表済みの論文はリストにある通りである。口頭発表は、上で述べた学会やシンポジウムでおこなった。全体の総括として、現在論文を執筆中である。

４．研究成果

本研究では、従来の研究で「ファスチアン」と一括りに議論されていた産業革命前の亜麻と綿の混織物を、同時代人に「ファスチアン」と認識されていたものとそれ以外のものに分け、次の２つのアプローチをとった。

（１）
ひとつは、前者、すなわち当時「ファスチアン」と認識されていた織物の特徴が布表面の起毛にあったことと、中世イタリアにおいても「ファスチアン（フスターニョ）」と呼ばれた織物や同じく布表面に起毛のあるヴェルヴェットが製造されていた点を手がかりとするものである。そこでは、それぞれの時代や地域で、①ファスチアンがどのような用途に使用されたかといった消費の側面と、②その起毛がどのように生み出されたかといった生産技術の側面を考察対象とした。
ランカシャー製のファスチアンは、ヴェルヴェットの下級代替として使用されるものから、労働者の外衣に仕立てられるものまで、その種類は多様であった。ファスチアンの一種であるヴェルヴェッティーンは、ヴェルヴェットの派生語である。当時のランカシャーでは、ハサミの片方の刃を布表面に浮いた糸の下に滑り込ませて緯糸を切る起毛方法が確立した。それは熟練の要する作業であり、紡績および織布工程が機械化した後も長らく手作業でおこなわれた。また、このファスチアン・カッティングは、ヴェルヴェット・カッティングとも呼ばれ、高級織物ヴェルヴェットとの関連を示唆している。
中世においてイタリアは絹製ヴェルヴェットの一大産地であった。ルッカやヴェネツィアで製造されたヴェルヴェットは、当時ヨーロッパに流通する織物の中で最高級品に位置付けられるものであり、東方にも輸出された。このヴェルヴェットの起毛は織布途中に経糸を切る方法で生み出された。また、その起毛の高さが揃っているかどうかも重要であり、織布工には高い技術が要求された。以降、ヴェルヴェット生産もヨーロッパの他の地域に拡大することになるが、その中で、他の繊維を使った類似品の生産が確認できる。
一方、ファスチアン製造も中世以降、イタリアから大陸ヨーロッパを北上する形で拡大したが、その原料は亜麻と綿だけではなく、羊毛が用いられるケースも確認できる。また、その起毛加工は、あざみでつくられたブラシで布表面を擦ることによって繊維を毛羽立たせ、その後その毛羽を大バサミで刈り揃えるという方法でおこなわれた。この方法は、毛織物製造の最終工程と類似するものである。
ファスチアンの原料にどの繊維を用いるかは、その土地でどの繊維が入手できるかという問題とともに、それが起毛を生み出すのに適した繊維であるかという点が決定要因となっていたとみることができる。毛織物の産地に羊毛を原料とするファスチアン製造が見られた例は、イギリスのノリッジでも確認できる。また、毛織物と同じ起毛方法をファスチアンでも確認できるように、繊維の種類と起毛技術の適合性も重要であった。産業革命前のランカシャーにおいてファスチアンの原料は亜麻と綿に落ち着いたが、亜麻が経糸に使用されたのは、当時のランカシャーの技術では経糸に用いることのできる強度のある綿糸を安定供給することができなかったこと、そして緯糸に綿が使用されているのは、肌触りの良いふわりとした起毛には亜麻よりも綿が適していたことが、その背景にあった。産業革命を経て経糸用の綿糸生産が可能となったとき、ファスチアンも純綿製となったことはあまり知られていない。以上のことから、「ファスチアン」

を亜麻と綿の混織物であると定義づけてしまうことは、イギリス綿業の歴史を見誤ることにもつながるだろう。ここでは、繊維別の考察ではなく起毛という特定の性質がファスチアン製造の歴史を紐解くカギとなったが、同様の視点は他の織物にも応用できるものである。

（2）

もうひとつのアプローチでは、18 世紀ランカシャーで製造されていた「ファスチアン」以外の織物に着目する。この織物は、当時の人に「コットン・リネン」もしくは綿が混ざっていても「リネン」と呼ばれていた（ここではそれを「ランカシャー・リネン」とする）。このランカシャー・リネンが、17 世紀後半以降イギリスに輸入されブームを引き起こした「キャラコ」と呼ばれたインド製綿布の代替品となったものである。ここでは、このランカシャー・リネン業と他のヨーロッパの地域のリネン業との競合関係を考察した。

この研究のために、当初はヨーロッパ各地での調査を予定していた。しかし、コロナ感染拡大の影響で計画通りに調査が遂行できなかった。またこのタイミングで奴隷用の衣服に関する共同研究への招待を受けたことから、以下のように研究内容を変更した。

「リネン」の中でも奴隷の衣服に用いられる種類に研究対象を限定すること、特に、アイルランドのリネン業については、研究代表者はこれまでの研究蓄積があったため、そこを発展させる形で本研究に繋げること、である。アイルランドは、ランカシャー・リネンと競合関係にあっただけでなく、ランカシャーへの亜麻糸供給者でもあった。この点を踏まえ、アメリカに輸出される粗質リネンの製造を推進する政策とその社会経済的および文化的背景を明らかにするという方向に研究内容をシフトした。

そこで着目したのが改良思想である。この思想は貧困や産業の欠如など国内の社会経済問題の解決を目指すものとしてアイルランドのエリートの間に広く受容された。18 世紀アイルランドの粗質リネン製造は、もともとは 17〜18 世紀転換期のイギリスからの経済的な要請に応えるところから始まったが、本研究では、その後のリネン業政策がこの改良思想の影響を受けて推し進められたことを明らかにした。18 世紀中頃にかけてのアイルランドでは、この思想がエリートの間で文化として定着し、実験、出版、協会の設立などを通じてリネン業政策に反映された。こうしたリネン業の実践は貧困者に職を与えることによって、社会経済問題を解決するための「愛国的な」方策とみなされたのである。従来アイルランドの愛国心は、イギリスからの独立という政治的な意味合いを持って議論されてきたが、ここでは、イギリスの支配下でいかにアイルランドを「改良」するかというより実際的な意味をもつものであったことがわかる。

アメリカ市場向けの奴隷用リネン（オズナバーグ）の生産は、この改良思想の広まりのなかで積極的に推し進められた。アメリカ側の史料からも 1750 年代から 70 年代にかけて、アイルランド製オズナバーグがイギリスや他のヨーロッパ製のオズナバーグや同様の織物と競合しながら市場に浸透したことが確認できる。それ以降、アイルランド製オズナバーグがアメリカ市場でほとんど確認できなくなるが、それはイギリスやアメリカでの工業化の進展のみにその要因を求めることはできないだろう。当時の改良思想とその実践がアイルランド社会で失敗した要因を探る必要がある。この点は、今後の課題である。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計3件（うち査読付論文　0件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　3件）

１．著者名 竹田泉	４．巻 239
２．論文標題 18 世紀アイルランドにおけるオズナバーグ製造とアメリカ市場への輸出に関する考察	５．発行年 2023年
３．雑誌名 成城大学経済研究	６．最初と最後の頁 259-273
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 竹田泉	４．巻 230
２．論文標題 18世紀アイルランドの改良思想とリネン業 ： R・スティーブンソンの政策提言に関する史料分析	５．発行年 2020年
３．雑誌名 成城大学経済研究	６．最初と最後の頁 101-117
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 Izumi Takeda	４．巻 218
２．論文標題 A framework for a new understanding of pre-industrial European textiles	５．発行年 2018年
３．雑誌名 成城大学経済研究	６．最初と最後の頁 517-526
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計2件（うち招待講演　0件／うち国際学会　1件）

１．発表者名 Izumi Takeda
２．発表標題 Cotton and Linen. An Epistemological Approach
３．学会等名 Symposium "Textiles and Materiality: Mixing Fibres between East and West, 16th-20th Centuries"（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 竹田泉
２．発表標題 18ー19世紀イギリスの消費文化とジェンダーーグローバル史の視点からー
３．学会等名 政治経済学・経済史学会
４．発表年 2017年

〔図書〕　計2件

１．著者名 浅田進史、榎一江、竹田泉　編著	４．発行年 2020年
２．出版社 日本経済評論社	５．総ページ数 276
３．書名 グローバル経済史にジェンダー視点を接続する	

１．著者名 Izumi Takeda (Miki Sugiura ed.)	４．発行年 2019年
２．出版社 Hosei University Publishing	５．総ページ数 295
３．書名 Linking Cloth/Clothing Globally: The Transformations of Use and Value, c .1700-2000	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計2件

国際研究集会 Symposium "Textiles and Materiality: Mixing Fibres between East and West, 16th-20th Centuries"	開催年 2019年～2019年
国際研究集会 Popularizing Fabrics and Clothing 17th-19th centuries: Materiality, Value Formation and Technology	開催年 2017年～2017年

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関			
英国	University of South Wales	University of Warwick		